

■ホコリダニ 体長 0.25 ~ 0.5 mm の微小なホコリダニで、肉眼で見るとは難しく、観測するにはルーペなどの拡大鏡が必要です。

ホコリダニ類には様々な種が存在します。シクラメンに最も大きな被害を与える害虫の1つです。

シクラメンに寄生する害虫のなかで最も多く見られ、最も危険とされるものは：

- ✓ シクラメンホコリダニ (Tarsonemus pallidus Banks、Steneotarsonemus pallidus Banks)、Phytonemus pallidus (cyclamen mite) と同義
- ✓ チャノホコリダニ (Polyphagotarsonemus latus) または “broad mite” と呼ばれる。体長は前者より大きく、より寄生範囲が広いです。

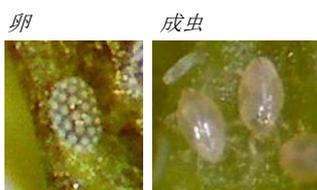
I-生態およびサイクル

生態サイクルは非常に早く、卵から成虫になるまでに要する期間はわずか 10 日です。年間に複数(8~10)のサイクルを繰り返すことが確認されており、つまり温室には何世代ものシクラメンホコリダニが生息することになります。成虫の生息期間は 10~30 日です。

成長のどのステージにおいても光を嫌い、涼しく、湿った所を好みます。よって、陽射しや熱から避け、株の中心や花芽、葉芽といった部分に潜みます。ホコリダニの「骨格」にはキチン質がわずかしか含まれておらず、外皮が柔らかいため、株からの蒸散によって乾燥するのを防いでいます。湿度が 70 % より下回ると死亡します。

植物組織の柔らかい部分に口針を刺し、細胞の内容物を吸い取ります。また花や葉の生長を阻害する物質を分泌します。幼虫期には最も被害を加えます。

チャノホコリダニ (Polyphagotarsonemus latus) の各成長ステージ



卵 成虫
成虫になると黄色っぽくなる

© Rainer Wilke/Pflanzenschutzdienst NRW

II-症状

ホコリダニは微小であり、また株の中心に潜むので、外観からは寄生していることに気づきません。花や葉が成長した時にはじめて症状が見られるようになります。

葉



柔らかい(若い) 葉の表面がデコボコシ、光沢を帯びる

写真の2枚の葉は同じ株のもので、右：ホコリダニの被害を受けている、左：被害なし



生長部分(花芽、葉芽)に奇形や歪みが発生している



葉の裏側が褐色化し、葉の縁は内側に巻いている

花



若い花および花芽に歪みが生じている



花弁に濃い染みが発生している

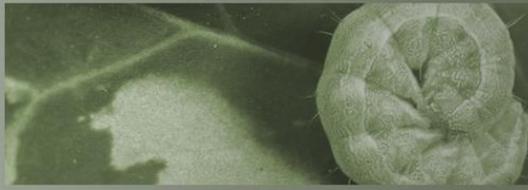


III-繁殖

ホコリダニの移動範囲は極めて狭く、1つの株に留まっています。オスがメスおよび幼虫を株の柔らかい部分へ運びます。

ホコリダニ自身では株から株へと移動することはできませんが、次のような方法で株間移動をすることがあります：

- ✓ コナジラミなどの他の虫の脚や触角に付着して移動。まれにスリップスやアブラムシなどが媒介することもあります。
- ✓ 風や通気で移動
- ✓ 作業中の手に付着して移動



シクラメンホコリダニ

III - 繁殖(続き)

既にホコリダニが寄生している他の植物からシクラメンに移ることがあります。ホコリダニが寄生しやすいものとしては、ニューギニアインパチェンス、セントポーリア、ガーベラ、フクシア、ダリア、グロキシニア、エラチオールベゴニア、アザレア、セロシヤ等があります。

IV - 予防 / 駆除

何よりもまず、殺菌消毒され清潔で、ホコリダニが生息していない用具で栽培することが基本です。相対湿度を 70% に管理できれば繁殖を抑えることができます。

早期発見

早期発見と早期防除につきます。ホコリダニを観測するには最低でも 10 倍に拡大できるルーペなどが必要です。ホコリダニは飛ばないので、粘着シートなどの罫では効果が見られません。

ホコリダニの生息に最適とされる気候条件を示す栽培地域(涼しくて湿度が高い)では、特に早期発見のため、株の中心部分などを定期的にチェックすることが重要です。

V - 薬剤防除

現在では有効な薬剤があります。

薬剤には 2 つのタイプがあります：

- ✓ 浸透移行性剤：根や葉から吸収され植物体内を移行します。ホコリダニが植物細胞の内容物を吸収する際、毒となります。
- ✓ 接触性剤：ホコリダニに付着することで殺虫効果があります。

薬剤のタイプにかかわらず、ホコリダニが潜み、栄養を摂取する株の中心部に薬剤を上手く注入させることが大切です。接触性のものは、ホコリダニを駆除するためにはダニに付着しなければなりません。浸透移行性のものは、“毒性”効果のためにはホコリダニが好む柔組織に届かなければなりません。

株の中心部に付着させるために、微量散布機の使用が有効です。これは薬剤を微粒子の形で吐出させ、温室内全体に行き渡らせます。この微粒子はほぼ空気のように軽く、ゆっくりと株に付着します。

薬剤が株の中心に届くよう、防除は株がまだ小さい発根期から始めなければなりません。

ホコリダニは次々現れるので早期駆除のために、また新芽にも薬剤を付着させるために、防除は定期的に行わなければなりません。

ホコリダニは卵のステージが最も薬剤抵抗性が高く、殺卵剤に用いられる成分は他の有効成分と合わせて使用するか、少なくとも連続使用を避けローテーション使用しなければなりません。

有効成分	効果	散布量	微量散布の量
ABAMECTINE (アバメクチン)	幼虫、卵	50 cc/hl	0,5 l/ha
BIFENAZATE (ビフェナゼート)	卵、幼虫、成虫	40 cc/hl	0,4 l/ha
ACRINATHRINE (アクリナトリン)	卵、幼虫	80 cc/hl	0,8 l/ha
MILBECTINE (ミルベメクチン)	卵、幼虫、成虫	50 cc/hl	0,5 l/ha

ご注意：植物衛生処理剤の規制、認可が頻繁に変わる今日、また、世界各国の規制が異なるため、薬剤使用において最新情報をご案内することは大変難しくなります。各自で植物防疫課にお問い合わせいただき、最新の植物衛生処理剤の規制、認可情報をご請求いただくようお願いいたします。

生物的防除

現在有効とされている天敵農薬は：

- ✓ チリカブリダニ (Phytoseiulus persimilis : Phytoseiulus System, Phytoseiulus T system, Phyto-line p, Spidex, Spidex Plus)
- ✓ ミヤコカブリダニ (Amblyseius californicus : Californicus system, Ambly-line cal, Spical)

これらは他のホコリダニ (特に *Tetranychus sp*) には高い効果が見られませんが、シクラメンホコリダニ (*Tarsonemus pallidus*) やチャノホコリダニ (*Polyphagotarsonemus latus*) では、残念ながらその効果は僅少です。

VI - 間違いやすい診断

過剰 EC / シクラメンホコリダニ



過剰 EC によって起こった葉の歪み

用土の伝導率が高く、かつ根系があまり発達しておらず弱い場合、ホコリダニによる被害に似た葉の歪みを生じることがあります。ただしこの場合、光沢とデコボコは見られません。

スリップス / シクラメンホコリダニ



スリップスによる擦り傷と染み

スリップスによる花卉への被害は、ホコリダニによるそれとの区別が難しい場合があります。擦り傷はほとんど同様です。ホコリダニの場合、生育の同じステージで花と若葉を同時に加害します。一方スリップスは、若い株では葉を、成株では花を加害します。